

# 現代の名工 県内から2人



工房で製品づくりの苦勞を語る南浦さん(宇陀市で)

厚生労働省が20日発表した「現代の名工」に、県内からは宇陀市の印傳製造工、南浦太市郎さん(64)と、桜井市のべっ甲細工工、池田和美さん(68)が選ばれた。21日に東京都内で表彰式が行われる。



様々な技法を取り入れたべっ甲細工を作る池田さん(桜井市で)

## 印傳製造工

### 南浦 太市郎さん 64

なめした鹿革に文様を施す「印傳」と呼ばれる工芸技法を用い、財布やかばんなどを製造販売する「印傳工房」(南都)「宇陀市菟田野古市場」の代表を務める。「現代の名工」の名に恥じないよう、これからも精進していきたい」と決意している。

宇陀市出身。短大を卒業し、地元で会社に就職した後、25歳の時に退職して鹿革を染色する仕事を始めた。

この技法は手間がかかるが、温度や湿度、煙の立ち方の違いによる微妙な変化が、独特の風合いを生み出す。現代の印傳は染料や漆で文様を描く方法が主流だが、南浦さんは、奈良時代が始まりとされる「ふすべ技法」を独学で習得。革に糊や糸で文様を施し、わたなどの煙でいぶして染める方法だ。

## 奈良期の技法 独学で習得

## 魅惑の輝き 今も試行錯誤

ウミガメの一種タイマイの甲羅から多彩なデザインの商品を作り出すべっ甲細工を手がけて半世紀。複雑な文様を表現する「透かし彫り」を長年修練し、得意とする数少ない職人だ。現代の名工に選ばれたことを「励みになるし、後押しにもなる。夢心地ですね」と、率直に喜ぶ。

幼少期から桜井市で過ごし、中学卒業後は、貝彫刻の職人だった兄の紹介で大阪府東大阪市のべっ甲職人の下に弟子入り。10年間で技術を覚えた。

転機は、1986年の正倉院展で、べっ甲などで花鳥文を表した「玳瑁螺鈿八角箱」を見たこと。「なぜ、べっ甲は千数百年間も人々を魅了し続けるのか」と考え、べっ甲の生かし方を模索するようになった。

正倉院宝物にも用いられる葡萄唐草など、古代の文様も研究し、作製した小物入れを百貨店で販売すると、人気を博した。

透かし彫りと螺鈿の技法を組み合わせ、ネックレスやイヤリングといった和装以外のアクセサリーの製作にも取り組んでいる。

## べっ甲細工工

### 池田 和美さん 68